

日本の詩歌

2

土井晩翠
薄田崋
蒲原有三
木露風

中央公論社

土井 晚翠
薄田 泣菫
蒲原 有明
三木 露風

昭和44年3月5日初版印刷

昭和44年3月15日初版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵写真印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

土井晚翠

天地有情

曉鐘

天馬の道に

薄田泣堇

暮笛集

ゆく春

二十五絃

白羊宮

142

蒲原有明

草わかば

203

独絃哀歌

210

春鳥集

230

有明集

205

有明詩集

493

三木露風

廃園

305

寂しき曙

321

白き手の獵人

328

幻の田園

347

蘆間の幻影

362

詩人の肖像

村松 剛

鑑賞

安東次男

年譜

土井晚翠

天地有情

希望

沖の汐風吹きあれて
白波いたくほゆるとき、
夕月波にしづむとき、
黒暗くろやみよもを襲ふとき、
空のあなたにわが舟を
導く星の光あり。

ながき我世の夢さめて
むくろの土に返るとき、

『天地有情』は、土井（はじめツチイ、のちにドイ）晩翠（本名林吉）の第一詩集。島崎藤村の『若菜集』に遅れること二年、明治三十二年四月に博文館より発行された。久保天随と高山樗牛が同館の大番頭大橋乙羽に説いて、しぶしぶ出版を承知させたが、予想外の好評で年々版を重ね、詩人晩翠の声価を藤村と並び立たしめるにいたった。題名は、集中の一篇「暮鐘」の詩句「天地有情の夕まぐれ」より採る。序・例言・詩四十一篇、ほかにカーライル、シェリー、ジョルジュ・サンド、エマソン、ユゴー五家の詩論ならびに詩人論の抄訳を付録として収める。収録詩篇の多くは、雑誌『帝國文学』ならびに『反省雑誌』に発表されたもので、いちばん古いものは『帝國文学』明治二十九年十二月号に発表された「紅葉青山水流急」にさかのぼる。当時晩翠は

心のなやみ終るとき、
罪のほだしの解くるとき、
墓のあなたに我魂を
導びく神の御声あり。

嘆き、わづらひ、くるしみの
海にいのちの舟うけて
夢にも泣くか塵の子よ、
浮世の波の仇騒ぎ

雨風いかにあらぶとも
忍べ、とこよの花にはふ——

港入江の春告げて、
流るゝ川に言葉あり、
燃ゆる焰に思想あり、
空行く雲に啓示あり、

東京大学英文科に在籍中で、『帝
国文学』の編集にたずさわって
いたが、たまたま誌面の埋め草の必
要から詩を書きはじめたという。
とはいえ、もともと挙芳と号した
父の感化で年少のころより水滸伝、
三国志、十八史略などに親しみ、
かたわら外山正一らの『新体詩
抄』の愛読者だった。とりわけ矢
田部尚今訳「グレイ氏墳上感懐の
詩 (An Elegy Written in a
Country Churchyard)」は、晚
翠の西洋詩愛好のきっかけとなっ
た。

「例言」にいう、「詩をもつて遊
戯となし閑文字となし彫虫篆刻の
末技となすは古来の漸なり、この
弊敗れずんば真詩決して起らじ。
一般読者の詩に対する根本思想を
刷新するは今日国詩発達の要素な
るを信ず」。「序」にも同様趣旨の
宣言をかかげているが、詩を作り
はじめてから三年、すでに晩翠に

夜半の嵐に諫誠あり、
人の心に希望あり。

星と花

同じ「自然」のおん母の
御手にそだちし姉と妹
み空の花を星といひ
わが世の星を花といふ。

かれとこれとに隔たれど
にほひは同じ星と花
笑みと光を宵々に
替はすもやさし花と星

とって詩は志となっていた。

「希望」は、『帝國文学』明治三十年二月号に発表。『天地有情』では巻頭詩。第一、二、四連の対句法や、第四連冒頭「港入江の」に見られる疎語をもって一種の成語を組むとき用法には、晩裂好みの調べがすでによく現われている。第三連のみこれら避けて破調をもつてしたことも、対句法を効果的にしている。

「星と花」は、晩裂短曲の中で最も愛誦されたものの一つ。晩裂を理想型詩人、理想型詩人と見るのは通説であるが、これに対して「あまりにも感じやすい、心弱いまでに哀感の詩人」（中野好夫「土井晩裂」という見方もある）この詩篇など、そうした一面をよく示している。

「彼は調においては藤村に及ばず」

されば 曙^{あけぼの} 雲白く

御空の花のしほむとき
見よ白露のひとしづく
わが世の星に涙あり。

夕の思ひ

“Où va l'esprit dans l'homme ? Où va

l'homme sur terre ?

Seigneur ! Seigneur ! où va la terre
dans le ciel ?”

—Hugo : Les Feuilles d'Automne.

“O life as futile, then, as frail !

O for thy voice to soothe and bless !”

“What hope of answer, or redress ?

Behind the veil ! behind the veil !”

—Tennyson : In Memoriam.

辞においては遂に羽衣に劣る。さ
れどもその想の高くして情の清き
ことは遙にこの二者を凌ぐ。『晩
翠の詩』『太陽』明治三十年十二
月』とは、『天地有情』がまだ世
に出なかつた時期に高山樗牛が書
いた推輓^{すいげん}の言である。それは「星
と花」など一群の愛恋小曲につい
てもいえなくはないが、「夕の思
ひ」「馬前の夢」などを経て「星
落秋風五丈原」にいたる、運命の
計りがたい悲劇によせる想いの中
で、いつそうよく示されている。

その一面、詠嘆の過剰やこれらの
長詩を単調な七五調で押し通すこ
との無理とも相俟^{あひさ}つて、「作者の
学問的修養の誇りが詩句の純真を
穢し、知識のいたずらなる重みが
フレキシブルな詩美を歪めてしま
っている」（日夏耿之介『明治大
正詩史』『夕の思ひ』について
の評）こともなしとしかつた。

作者が好んで用いる対句法など

(一)

思入^{おもひいり}日を先きだてゝ

たそがれ近き大空に

うかびいざよふ雲のむれ

暮行^{なごり}くけふの名残とて

見るめまばゆきあやいろを

染むるは何のわざならむ。

あるは幾重の空のよそ

あるは幾重の嶺^{たね}のうへ

かろく流るゝくれなゐは

セラフ、ケラブの旗を見せ

ゆるく緩^{たな}びくむらさきは

あまつをとめの裾^{すそ}や曳^ひく。

も、「夕の思ひ」第二章第二連の「こゝにバイロン血に流きて／死と疑の子」となりのり／こゝにシルレル声あげて／理想は消ゆ」と叫ぶなり。」のようにおおむね成功している箇所もあるが、第三章終連の「嗚呼人榮えん沈み／国また起り国亡び／かくて廻りて極みなく／かくて流れてはてもなく／時よ浮世よいつくより／時よ浮世よいつちゆく。」のように、いたずらに觀念の空転をひびかせるはめに陥つたものも少くない。

にもかかわらず晩翠の詩が「詩は長きが故に貴からず、されども彼の詩においては長ければ必ず読むに足り、短ければ多くは誦するに堪えず」(小山田浦「現今の新体詩家」土井晩翠「帝國文学」明治三十五年九月号)と評されたのは、興の赴くところ一氣に情をつくしおのずと朗誦を誘い出す、その調子の高さにあつたと思われ

夕／＼の空の上

替るも／＼の面影を

替らぬ愛に眺むれば

たゞ聯想の端となる

雲よ自在のはねのして

いつくのはてに翔けり行く。

あゝ夕雲のかけりゆく

空のあなたぞなつかしき

心の渴きとどむべき

そこに生命の川あらむ

真理のかどを開くべき

そこに秘密の鍵あらむ。

嗚呼^{ああ}夕雲のはねのうへ

たれか「涙の谷」棄てゝ

る。「精細の中における高壮の美、簡樸の中における雄大の趣は、彼の理解せざる所」と鼎浦は続けていつている。

先掲日夏の『明治大正詩史』には、「俗見に阿諛してことさら勇壯活潑をてらう政党壮士の醉歌のごときを作る愚人も、時代の波の汐さきを覗^{のぞ}つて飛び出たこともあったが、いかに俗見が社会に重んぜられる時代であっても、このようなものの文壇的存在はゆるされなかった。その中で、いささか必然性ある縷^{いと}を引いて壇上にあらわれた二人の雄健な姿致を極愛する作家があった。一人は天地有情の詩人晩翠で、一人は〈男児の歌〉を叫んだ与謝野鉄幹であつた」と指摘している。日夏はまた、「彼の詩を好む者は単に読詩家ばかりでなく、一般の人々特に青年男学生にかぎられていた」ともいう。このような特徴は藤村流の個人体

荒鷺翔けり風迷ふ

空のあなたに飛行かむ
浮世の暗にしられざる
光はそこにてるべきに。

花より花にむれとびて
蜜を集むる蜂のごと

星より星に光をと

飛行く魂を眺めけむ

詩人のくしきまほろしを
たれかうつゝに返すらむ。

(二)

消えしエデンの花園の
おもわは今も忘れず
ほす味にがきさかつきの

駢に根ざした抒情詩にはおよそ見られぬところで、大町桂月が『天地有情』を評して、「その詩想の一本調子なる、その用語の妥帖を欠ける、またその難渋の弊に陥れるところあるなど、欠点少しとせざれども、余は尤もその詞に意に沈憚として調高きを愛して措かず」(『天地有情を読む』、『文芸倶楽部』明治三十二年八月号)といったのは、当時一般の公約教的受け取り方であつた。しかし実生活上の晩翠は、女婿中野好夫も指摘するように、あまりにも感傷的で弱気な一面をもつていたようであるが。

翌年明治三十三年『中央公論』二月号に、鉄幹は「晩翠君を懐ふ」と題して、つぎのような詩を掲げた。

十二万春すぎば
枯れたる骸骨に花ありや

底なる澱に酔はんとて

塵の浮世に塵の身は

かくもいつまで残るらむ。

涙の谷にさまよひて

ねぬ夜の夢に驚けば

こゝにバイロン血に泣きて

「死と疑の子」となのり

こゝにシルレル声あげて

「理想は消ゆ」と叫ぶなり。

(二)
アボンの流しづかにて

すゞしく月を宿せども

見えぬそこひに波むせび

(三)
グラスメヤアの水面にも

うつる此世の影見れば

神人は泣く眼なき鬼の

利慾のちまたに群れて行くを

あゝ高いかな君が詩袖に秘めて

玉売るみやこの市に呼ばぬ

酒樽ありても剣の前に

雄心尽くると我れは泣くに

さはいへ神の子情ありて

しばらくこゝに人と成る

乞ふ見よ釈迦は山を出で

基督十字の刑に就く

雪ある巖間の月を愛でて

梅花にやどれる霊にばかり

ひそかに醍醐の瓶を斟んで

許さんは君慈悲にあらず

わが道いく種に乱れては
婆羅門人を畸形にす

君見ずや現代の小詩風

これ餓鬼の集る果実なり